
フロート・ワールド

犀川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フロート・ワールド

【Nコード】

N8136P

【作者名】

犀川

【あらすじ】

暗闇の中、月夜に照らされた偽りの少年と少女。江戸川コナンと灰原哀の、一晩の思い出。

（前書き）

深い沼に落ちたこの身体を地上へと導いてくれる——
そんな奇特な人が居るとしたら、それは貴方。

月明かりが、薄暗い室内を照らしていた。

サッカーボールが転がる部屋。その角に置かれたベッドの上で、栗色の髪の少女は目を覚ました。上体を起こして手を動かすと、まだ夢見心地な鈍い頭とは裏腹に、身体は熱を帯びたまままで動作も軽い。

「……どれくらい眠っていたのかしら」

灰原哀は、素肌にかかった毛布をよけると、生まれたままの姿でカーテンが開放された窓際まで歩いた。そこから振り返ると、それまで自分が眠っていたベッドで眠る同年齢の少年の姿が視界に映る。ファッション性の高いチタンフレームの黒縁眼鏡をかけたまま眠る少年は、シーツにくるまり、静かに肩を上下させていた。

少年の名は、江戸川コナン。

少女が愛する人の、偽りの名前。

7年前のあの日。突如、小学一年生としてこの世に産み落とされて以来、灰原はずっとコナンと運命を共にしてきた。下らない冗談を言っては笑い、お互いの知識を持ち寄っては幾つもの事件を解決し、同じ組織を敵に回し。不安で底の見えない悲しみに少女がその身を投げたとき、少年は命懸けで少女を救い出して、叱った。そして気がつけば、幼い姿をした少女にとって、同じ境遇の少年の存在は非常に大きなものへと変化していた。

灰原は笑う。

「ねえ工藤君。私達の身体を小さくした例の薬の解毒剤は結局完成

しなかった。貴方は工藤新一に戻れなかった。私は貴方を救い出せなかった。こんな私を、貴方は愛する女性の代わりに抱いたのかしら。私は正直、それで満足だった。私は貴方とひとつになりたかった。貴方を……愛していたから」

昼間、コナンが灰原に対して行ったこと。

それは酷く乱暴なものであり、まるで目の前にある何かを必死に忘れたがっているようだった。彼は一体、何を忘れようとしていたのか。灰原の脳裏に、自分の本来の年齢より1つ年下の長い黒髪の少女が浮かんだ。——これが、真相だと。

灰原は全てを見抜いた上で、彼女は少年を受け入れた。それが少女の罪滅ぼしであり、唯一、果たすべき義務だった。

「バーロ」

窓枠にもたれかかった灰原が視線を床に落としていると、心地の良い低音が彼女の鼓膜を震わせた。声変わりを終えたばかりの、少し不安定な低い声色。

灰原は顔を上げた。

そこには上体を起こし、ベッドの角に腰掛けるコナンの姿があった。

コナンは灰原の姿を見るや否や、すぐに顔を背けて頬を掻いた。

「先に起きたなら、服くらい着ろよ」

灰原は、頬が熱くなるのを感じた。それでも努めて平生を装うと、灰原はそっと窓際のカーテンを手で引き寄せ、それに包まる。

「……さっきの話、聞いてたの？」

灰原が問い掛けると、コナンは無言でベッドを降りた。
無造作に床に散らばる彼女の服を拾い集めると、灰原へ投げる。

「ほら」

灰原がカーテンから手を離し、両手でそれを受け取ると、コナンもまた眠る前に脱ぎ捨てた服を拾い、襟シャツに袖を通してボタンを留めた。

「……悪かったな」

背を向けた灰原が、無言でスカートのホックを留めていると、コナンが言った。

「本当はもっと、優しくするつもりだった。
お前が傷つかないように、そっと触れるつもりだった」

コナンはそつと自らの拳を握り締める。

「忘れられねえんだ。思い出しまうんだよ、お前が組織に連れ去られた日のことを。お前と寝た後、次の日にはお前が居なくなっちまうんじゃないかって、怖くなるんだ」

黒のセーラー服。上から下まで昼間の服装に身を包んだ灰原は、コナンを振り返った。コナンは灰原に背を向けていた。

「……あら」

灰原は唇の端を片方だけつり上げた。

「あの頃はまだ、プラトニックだったわ」

向けられた背中だけでは、彼がどのような表情をしているのか知ることとは出来ない。

しかし、大きくため息を吐く音が聞こえたところを見ると、灰原の思惑は成功したみたいだ。『ああ言えばこう言う』——そう。私と貴方の関係は、本来こういうものだったでしょう?……灰原は淋しげに微笑んだ。

「灰原」

コナンが少女の名を呼んだ。

「……俺は、お前を誰かの代わりだと思ったことは一度もない。お前は、俺と蘭の関係が終わったことを心配してるかもしれないが、蘭とはいずれこうなる運命だったんだ」

だから。コナンは天井を仰ぐと、瞳を閉じた。

「灰原。お前が俺のことで気に病むことは、一つもないんだよ」

「……バカね」

灰原は言った。

「私が薬を作らなければ、こんなことにはならなかった。貴方はきつと蘭さんと結ばれていた。運命だなんて——軽々しく口にしないで」

そして少女は瞳を伏せる。

運命という二文字。灰原は心の中で繰り返し呟いた。

貴方が示す運命は、私の身体を重くして地の底へと縛り付ける、
悪魔のささやき――

「私は貴方に、幸せになつて欲しかった」

少女が閉じた瞼の奥から、自然と涙が零れ落ちた。

空中で雫となったそれは床を濡らし、月明かりに照らされて白く光った。

「こっちに来いよ、灰原」

コナンは天井を仰いだ。

「俺の隣に来て、いつかみたいに一夜を明かそう。それで、もう日付が変わっても、お前はここから消えたりしない……俺に、そう信じさせてくれよ」

「……貴方、今日はやけに饒舌なのね」

灰原はそつと、服の袖で涙を拭った。コナンは笑った。

「そりゃあ饒舌にもなるさ。――好きな女の前だからな」

灰原は息を飲んだ。コナンは向き直ると、正面から灰原を見つめた。

「愛してるんだ。お前のこと」

それまで一度も向けられたことのない、優しく穏やかな瞳だった。

灰原は、はつとした。

私はこの瞳を知っている。

灰原は、これまで彼の隣で何度もこの目を見てきた。
それは彼が彼の幼なじみに対し、向けていた瞳に酷似していた。
窓から入り込んだ月明かりが、2人の少年少女を静かに照らして
いる。

「嘘つき」

灰原はコナンの胸に飛び込んだ。

コナンはそつと受け止め、少女の肩を抱き寄せる。

灰原は思った。

胸が締め付けられるようなこの痛みは、きっと彼の腕の中に居る
せい。

——罪の意識によるものではないのだ、と。

（後書き）

個人的には、工藤新一には毛利蘭、江戸川コナンには灰原哀がお似合いだと思っている犀川です。今回は、寝る前にGARNET CROWのFloat Worldを聞きながら、携帯の電源が落ちるまで粘りました。

コナンに熱中する前からGARNET CROWの中で好きな曲だったFloat Worldで、人生初のコ哀。曲については、1番が灰原、2番がコナンみたいな感じで解釈しました。歌詞を引用するなら、灰原は『どんなに孤獨が私を支配しても、誰かに心明け渡せない』と思っている。コナンは灰原に『君がいつかふと淋しくて振り返る、その時に抱きしめたい』と思っている。そんな距離感を描けていたら嬉しいです。

PC使えるようになったので、今更ですが追記修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8136p/>

フロート・ワールド

2011年10月7日03時48分発行